

漢法苞徳塾資料	No. 008
区分	診断・脈診
タイトル	「胃の気の脈」論について
著者	八木素萌
作成日	1993.06.05

A. 「胃の気」の脈論は、藤本蓮風氏の発明と言うべきものとする。

「胃・脾」の脈状についての『素問』の記述は、藤本蓮風氏の「胃の気の脈」とは明らかに異なっている。また、『難経』においても「胃・脾」の脈状記述は極く僅かである。「15難」には確かに「胃の気」と言う表現は見られるが、「胃の気」の脈と言う独立した脈を記述したものでは無い。

「胃の気の脈診」論の、「胃の気の脈」とは、

- ・「胃」脈や「脾」の脈を、その特徴を記述でき、かつ、診定できること、
- ・これが、「胃の気」脈を触知していると言える為には、『難経』15難や『素問』玉機真蔵論第19に言う「胃の気」とは異なっていること、
- ・そして独立した脈診論になっているもの、

でなくてはなるまい。

『素問』玉機真蔵論第19の説は、『難経』の説と同じように、胃の気の不足は「本蔵の脈を独り現わしめる」と言う。つまり、病脈は胃の気の不足しているものであると言う認識の上に成立している。

B. 平脈は、「僅かに季節の脈が現れていて五蔵の何れの脈とも判断し難い和平な脈状」である。これに反して、病脈は、「ある季節の脈」や「ある蔵の脈」が偏って表れていて「和平な脈」とは到底言えないような、乱れて不安定な脈で胃の気の不足な脈と言う。「胃の気」の不足を示している脈は「病の脈」であるというのが、『難経』の記述であるから、病的な脈とは「胃の気」不足の脈であり、平脈とは「胃の気」が充足されている脈を言うものである。このことは、患者の抵抗力の度合いを、主に脈状から診ると言う、診察アングルを成立させ得る点がある。

C. 「胃・脾」の脈は、「緩脈」または「代脈」とも呼ばれているが、「湿」や「労倦」や「長夏」の脈とされ、「ベツタリとした脈」「締まりに欠けるほど中位に診られる脈」（中位または、中位の僅かに浮の位置、又は、僅かに沈の気味の位置などに診られる）が診られる。脈が「浮」に偏るときにも、「数」の度合いは「やや数」の程度に過ぎないし、熱も中熱が治りにくく連綿と続くことが多い。このような場合は、長夏の「湿熱」の邪に感冒した「伏暑感冒」が大部分である。

「労倦」の場合は、気虚を起こすので、「締まりのないやや浮いた」脈となり「湿」の脈に良く似ているし「虚脈」でもある。そして労倦は「風」に冒されやすい。何れにせよ、「胃脈」「脾脈」の脈状が触知される場合には、明らかに病んでいるのである。

## 胃の気の脈とは

☆「胃の気」がある脈と言う場合の「胃の気の脈」について、「具体的」に「脈状」を表現した記述は古典には見られない。「四時の脈」「六経の脈」「五蔵の脈」については、それぞれの脈状は具体的に記述されているのに、「胃の気の脈」については、脈状表現はアイマイであり間接的である。

☆「病」んだ場合には「胃の気の脈」は現れるとか、または、15難の記述のように、例えば春には微かに「弦」であれば「平」＝健康であり「胃の気」が良い脈状であるが、「弦」がハッキリする場合には「胃の気」が少なくなっている状態を示すもので「病」の脈状なのであり、「タダ弦」である脈状は「胃の気が無い」脈で「死脈」である、と記述されている。

☆「胃は水穀の海、四時に稟くるを主り、皆胃の気を以て本と為す、是れを四時の変病、死生の要会と謂うなり……（15難）」と記述するが、「胃の気」の脈状は独立しては記述されていない。「胃」とは表裏に在り「胃の臓」であり時には「胃脾」とか「脾胃」などのように単語的に取り扱われる「脾」についても「……其れ平和なれば見らわ<sup>る</sup>るを得べからず、衰えれば乃ち見らわ<sup>る</sup>るのみ……（15難）」と記述する。これは『素問』玉機真蔵論第19の「……善者不可見・悪者可見……」（善の者は見らわ<sup>る</sup>る可からず、悪の者は見らわ<sup>る</sup>る可し）の記述と軌を一にしている。

☆僅かに「……呼出心与肺・吸入腎与肝・呼吸之間・脾受穀味也・其脈在中……（4難）」（呼は心と肺に出で、吸は腎と肝に入り、呼吸の間に脾に穀味を受くるなり）、「……如九菽之重・与肌肉相得者・脾部也……（5難）」（九菽の重さの如くして肌肉とともに得る者は脾の部なり）などの示唆や、「……色黄・其脈中緩而大……（13難）」（……色の黄なれば・其の脈は・中・緩やかにして大なり……）、「……心脈緩甚者・脾邪干心也・心脈微緩者・胃邪干小腸也……（10難）」（……心脈の緩なること甚だしきは・脾邪の心を干すものなり・心脈の微かに緩やかなるは・胃邪の小腸を干せるなり……）とあり、49難では、五蔵が、風・熱・飲食労倦・傷寒（燥邪を秋の邪とする黄帝内経の記述を考慮すれば上空より身体を寒やす性質の邪の総称と解釈する）・湿（冬の気は冷涼で氷結した大地から受ける寒冷の邪気を表現している）などの邪気を受けた場合の、脈と症候と表現される声色臭味液などが記述されているが、脾の脈と飲食労倦の脈については「緩」と表現している。黄帝内経で代脈とか緩脈と表現され、後代には「大濡の脈」と表現しているものも見られるが、いずれも、『難経』が「緩」脈「緩而大」脈と言うものと同じであろう。

☆「胃の気」を意味する脈状については全く記述されていないのである。『傷寒論』には「胃の気」と言うよりも、「胃」＝広義の意味に用いて消化管の全体を意味している病候と「後天」の消息を候がうのに「趺陽脈」を脈診している。然し、病候の意味を把らえる場合の脈状記述のみである点は注意を要する。

☆「平脈」は、五蔵の何れの脈ともつかず、僅かに季節の脈が混ざっているものとされている。しかし、脈診してどの蔵の脈状であるかとか、脈状が季節の脈と異なって見られるとか、などは病脈であり、「胃の気」の脈が現れているもので病のある事を示しているのである。

☆脈位で脾胃を診るのは、六部配当としては手太陰足陽明の部位、呼吸と呼吸の間と言う呼吸のタイミングでは呼吸の間のタイミング、浮中沈では中位、菽法では9菽の位置、とされている。